

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：12613

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23001

研究課題名(和文) カント美学における醜さ：「醜の美学」の体系化へ向けて

研究課題名(英文) Ugliness in Kant's aesthetics: for systematizing "aesthetics of ugliness"

研究代表者

高木 駿 (TAKAGI, Shun)

一橋大学・大学院社会学研究科・研究補助員

研究者番号：90843863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、18世紀ドイツの哲学者I. カントの『判断力批判』(1790)において展開された美学理論に基づいて、醜さにはいかなる種類があるのか、そして、それらの醜さはいかなる関係にあるのかを明らかにすることを試みた。それにより、「醜の美学」の体系化へ向けた準備を行った。本研究は、私たちが醜さを言明する際に感じている感情(不快の感情)に着目し、その違いから醜さの分類を行った。また、感情を生み出す心の状態とそれを形成する認識能力の働きを軸に、種々の不快の感情および醜さの関係性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで「美しさの美学理論」として研究されてきた、『判断力批判』に代表されるI. カントの美学を、「醜さの美学理論」として捉え直すという独創的な学術的意義を持つ。また、単に一種類の醜さの概念だけでなく、複数の醜さとそれらの関係性を問題にする本研究には、私たちが素朴に直面する醜さやそれに関連する表象が何であるのか、直感的なものを学術的に明らかにするという社会的意義をあげることもできる。

研究成果の概要(英文)：In this study, according to Kant's aesthetic theory of the Critique of the Power of Judgment (1790), we tried to elucidate what kind of types ugliness has and how those types of ugliness relate to each other. The purpose of this study was preparing for systematizing "aesthetics of ugliness".

When we judge that something is ugly, we have a kind of feeling of displeasure at the object. Firstly, this study classified feeling of displeasure in some types, then following those types classified ugliness.

It is our state of mind which consists of our cognitive faculties (imagination and understanding) that generate feeling of displeasure. Based on the functioning of our cognitive faculties, this study elucidated a part of relation and system of various types of feeling of displeasure and ugliness.

研究分野：美学

キーワード：美学 哲学 カント 醜の美学 感情 認識論

1. 研究開始当初の背景

美学における醜さの研究は、19世紀ドイツの哲学者・美学者 K. ローゼンクランツにより開始されたと言える(Rosenkranz, 1853)。そこにおいて、醜さは、美しさの欠如ではなく、芸術の美的表現のために必要な要素として捉えられ、美しさのための手段として、より広義の美の理念のなかに位置づけられた。20世紀に入ると、美しさというカテゴリーとの関係では理解不可能な芸術作品群の登場により、醜さには、それらの作品を評価する基準としての積極的意義も見出されるようになった。それが崇高さを惹き起こす醜さである。このことを解明したのが、J. デリダの研究(Derrida, 1975 etc.)であると考えられ、近年では、W. メニングハウスや宮崎裕助の研究(Menninghaus, 2011, 宮崎, 2009 etc.)がその発展を担っている。

しかしながら、醜さは、芸術にのみ確認される性質ではなく、乱雑さなどの、崇高さとは関係しないものもある。それにもかかわらず、醜さに関する既存の研究は、芸術のみを対象とし、崇高に結びつく醜さに集中していると言え、そこには、網羅的・体系的視点が欠落していると言わざるをえない。そこで、本研究は、醜さの網羅的・体系的理解を得ること、いわば「醜の美学」を構築することを将来の究極的な目的としたうえで、その目的遂行のための準備として、醜さの類型化、および、別種の醜さの体系化を試みた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、醜さに関する体系的な美学理論の構築という究極的な構想にむけて、醜さという美的性質を、複数の種類へと類型化するとともに、それらの体系性・関係性を明らかにすることであった。

3. 研究の方法

本研究は、醜さの類型化と体系化を行うために、18世紀ドイツの哲学者 I. カントの美学理論、とりわけ『判断力批判』(1790)に代表される美学理論を使用した。まずは、カントの美学理論では醜さの言明の根拠となる不快の感情が種別化されることに着目し、不快の感情の種別化と醜さの類型化を目指した。そして、不快の感情が心の能力(感性、構想力、悟性、理性)の協同的な働きによって生成される点にも着目することで、種々の不快の感情および醜さの関係性・体系性を、心の能力の働きのあり方に照らして、明らかにすることを試みた。以上の方法に応じて、本研究は、以下の通り、二つの研究内容を含む。

4. 研究成果

本研究の内容と成果は、次の通りであった。

(1) 醜さを類型化する研究 (2019年度)

2019年度は、『判断力批判』における不快の感情の種類に基づき、不快の感情から表出される醜さを類型化することであった。まずは、『判断力批判』、とくに第一部の分析を通じて、不快の感情の種別化を行った。カントが明示している不快の感情に加えて、明示しておらずとも快の感情の反対として考えられる不快の感情を考えることで、生理的な不快適/道徳的悪/乱雑さ/崇高さ等々に関する不快の感情を種別化することができた。これらの不快の感情を根拠として言明される醜さを、その不快の感情の性質や特徴に合わせて定義し、類型化を行った(生理的な醜さ/道徳的な醜さ/純粋な醜さ/崇高の醜さ etc.)。以上の作業とともに、並行して、醜さに関わる近年の美学一般の研究(Korsmeyer, 2004, etc.)の検討も行った。その結果として、カントの美学理論(あるいは、西洋の近代美学理論一般)では漏れてしまうジェンダーの観点に寄る不快の感情および醜さを発見するにいたった。これにより、本研究を通じて、理性中心主義・男性中心主義のカント美学の一つの限界を発見することができた。

2019年度の研究成果については、カント研究会第328回例会(「崇高と尊厳: カント『判断力批判』の観点から」)、日本カント協会第44回学会(「『自然の崇高』の特異性」)、一橋大学哲学・社会思想学会第26回大会(「カントと公的空間—趣味の多元主義の観点から」)における口頭発表に反映させるとともに、査読付き雑誌である、日本哲学会『哲学』第71号(「醜さとは何か? : 『判断力批判』の趣味論に基づいて」)、日本カント協会『日本カント研究』第21号(「カントと『自然の崇高』」)に掲載の論文に反映させた。

(2) 醜さの体系性を究明する研究 (2020年度)

2020年度は、類型化された種々の醜さの関係性、体系性を、それぞれの醜さに共通する観点から考察した。種々の醜さが「不快の感情」に基づくという点に着目し、不快の感情が生成される構造に共通する特徴ないし構造を明らかにした。不快の感情は、感性、構想力、悟性、理性といった私たちの心の

うちにある能力が特定の仕方で協働的に働くことから生成される。本研究では、それらの諸能力の働きのあり方や協働の比率やバランスなどに照らして、種々の不快の感情および醜さ、それらの関係性を考察した。その結果、「感性による生理的な不快と醜さ→構想力と悟性による純粋な不快と醜さ→構想力と理性による崇高の不快と醜さ」という体系的なモデルの構想の導出にいたった。この体系モデルは、対象の複雑さに応じるモデルであり、そこでは醜さのグラデーションという形で体系的性が説明可能となる。

2020年度の研究成果については、2019年～2021年までの新型コロナウイルス蔓延の影響のため、口頭発表が中止や延期となり、それに伴って研究成果の論文化も遅れているが、成果の一部は、江戸川大学『紀要』第31号（「カントと公的空間：趣味の多元主義からのアプローチ」）に掲載の論文に反映させた。

とくに2020年度の研究内容および成果については、口頭発表および論文化を急ぎたい。論文化については、2021年9月に北九州市立大学基盤教育センター『紀要』に「醜さのグラデーションと体系：『判断力批判』に基づいて」（仮題）を投稿予定である。また、本研究で得られて研究成果は、2021年度継続中の若手研究「『自然の醜さ』とは何か？：不快の感情に基づく美学的解明」に反映・継承させる。

【参考文献】

Derrida, J., *Economimesis in Mimesis des articulations*, Aubier-Flammarion, 1975.

Kant, I., *Kants gesammelte Schriften*, Walter de Gruyter, 1900ff.

Korsmeyer, C., *Gender and Aesthetics: An Introduction*, Routledge, 2004.

Menninghaus, W., *Ekel: Theorie und Geschichte einer starken Empfindung*, Suhrkamp, 2011.

Rosenkranz, K., *Ästhetik des Häßlichen*, Königsberg, 1853.

高木駿, 「醜さとは何か? : 『判断力批判』の趣味論に基づいて」, 『哲学』第71号, 2020.

高木駿, 「カントと『自然の崇高』」, 『日本カント研究』第21号, 2020.

高木駿, 「カントと公的空間：趣味の多元主義からのアプローチ」, 『江戸川大学紀要』第31号, 2021

宮崎裕助, 『判断と崇高—カント美学のポリティクス』, 知泉書館, 2009.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高木駿	4. 巻 21
2. 論文標題 カントと「自然の崇高」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本カント研究	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木駿	4. 巻 71
2. 論文標題 醜さとは何か？：『判断力批判』の趣味論に基づいて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 172-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木駿	4. 巻 31
2. 論文標題 カントと公的空間：趣味の多元主義からのアプローチ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 江戸川大学紀要	6. 最初と最後の頁 311-320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高木駿
2. 発表標題 美しさの裏面にある醜さ：『判断力批判』の趣味論を頼りに
3. 学会等名 日本哲学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木駿
2. 発表標題 崇高と尊厳：カント『判断力批判』の観点から
3. 学会等名 カント研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木駿
2. 発表標題 「自然の崇高」の特異性
3. 学会等名 日本カント協会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木駿
2. 発表標題 カントと公的空間 趣味の多元主義の観点から
3. 学会等名 一橋大学哲学・社会思想学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------